

専門看護師紹介 / 小児看護専門看護師
谷地 千恵 (やちだて ちえ)

小児看護専門看護師は「子どもたちが健やかに成長・発達していけるように療養生活を支援し、他の医療スタッフと連携して水準の高い看護を提供すること」を役割としており、私は認定を受けてから今年で6年目に入りました。現在は成人病棟に勤務しており、日々の業務の中で病気を持つ子どもとの関わりはありませんが、患者さんの子どもへの支援について相談を受けることがあります。相談の内容は「親(患者さん)の病気を子どもにどのように伝えるか」が多く、患者さんと相談しながら子どもの年齢や理解力に合わせた伝え方を提案しています。子どもは何も知らされていない場合、現実とは異なる理解を示したり、「自分は何も教えてもらえない」という疎外感を感じる傾向にあると言われていたのですが、患者さんには「子どもに心配をかけたくない」という思いがあり、子どもへ病気を知らせることに躊躇う姿も見られます。子どもの不安を増強させないような言葉や説明の方法を選ぶように心がけておりますが、患者さんと子どもそれぞれの気持ちを尊重しながら支援の方向性を見出すことはとても難しく、理想と現実の中で私自身の気持ち

も揺れ、悩むことも多いです。相談をいただく度に、自分の提案する支援が適切なのか毎回迷いますが、患者さんとその家族が安心して闘病生活を送ることができるよう、少しでも力になれたらと思います。



専門看護師紹介 / がん看護専門看護師
横田 則子 (よこた のりこ)

今年6月から東15階病棟に勤務し、スタッフにとってはがん看護に関する身近なアドバイザーとして、また組織にとってはがん看護のスペシャリストとして、安全かつ効率的ながん薬物療法に関する医療システムに向けた活動を行っています。がん医療が入院から通院治療へパラダイムシフトするなかで、地域医療を支える看護スタッフの方から治療内容や副作用対策、治療選択や患者さんとそのご家族の心理支援に関することなど、よろず相談をいただきます。その中でがん薬物療法研修会や緩和ケア研修会へ講師として参加し、地域医療を担う同志と知識の共有を図りながら交流活動を行っています。私にとってそこで知り合った方と情報交換するのは心身ともにリフレッシュし、顔の見える関係の重要性を実感する瞬間となっています。がんサバイバーシップの概念に、「がんの診断を受けた人々がその後の生活で抱える身体的・心理的・社会的な様々な課題を、社会全体が協力して乗り越えていく」とあり

ます。がんを生き抜く患者さんが希望と尊厳を持って自分の音楽を奏でることが出来るよう、それを支える沢山の皆さんと協働しながら、アートとしての看護を深めたいと思っています。



お知らせ

● 2020年6月より「スマート会計」(会計あと払い)サービスを開始しました

専用受付機でエントリーし、専用窓口会計ファイルを提出していただくと、会計計算を待たずにお帰りいただけるサービスです。詳細につきましては当院ホームページをご覧ください。

● 新患日変更のご案内

歯科麻酔疼痛管理科は2020年4月より新患日に変更になりました。

新患日: 火・木・金曜日(祝祭日・年末年始を除く)
連絡先: 022-717-8352(歯科麻酔疼痛管理科外来)

加齢・老年病科は2020年5月より新患日に変更になりました。

新患日: 老年内科 火曜日/もの忘れ外来 火・水曜日/加齢画像外来 木・金曜日(いずれも祝祭日・年末年始を除く)
連絡先: 022-717-7736(加齢・老年病科外来)

● 「診療のご案内2020」を発行いたしました

患者さんをご紹介いただく際にご活用ください。

Information



編集後記

気がつけば2020年も半分が過ぎました。本来であれば、今頃はオリンピックで日本中が熱く盛り上がっていた頃なのではないでしょうか。今年の夏は猛暑が予想されています。例年と違い、ウイルス対策も行わなければならないかもしれません。外出の際は涼しい時間帯を選び、日傘を利用するなど、少しでも涼しく過ごせる工夫を行うと共に、早めの水分補給を心掛け、熱中症に注意して過ごしましょう。(地域医療連携係 M)

編集/発行

東北大学病院 地域医療連携センター
TEL: 022-717-7131
FAX: 022-717-7132
Eメール: ijik002-thk@umin.ac.jp
ご意見・ご要望は
地域医療連携センターまで
お問合せください。



w i t h

東北大学病院
地域医療連携センター通信
[With/ウィズ]

vol.50

2020年8月7日発行



地域医療連携センター

連携医療機関一覧を掲載したパネルを設置しました

当院では高度で専門的な医療や最先端の治療などに取り組んでいます。これらの医療を必要とする方が必要な時に受けることができるようにするためには「かかりつけ医」との連携が必要不可欠です。そのため、当院では2018年から、患者さんが「かかりつけ医」を持つことを推進するための様々な取り組みを行ってきました。

日常の健康管理はかかりつけ医で行っていただき、専門的な治療が必要な時には当院を紹介していただく事への患者さんの理解と協力を得るため、ポスターを作成し院内各所に掲示しました。また、リーフレットを作成して患者さんへ配布しているほか、職員の意識改革を図るために胸につけるバッジを作成し、医療スタッフに配布しました。

患者さんがご自身の「かかりつけ医」を探す際に役立てていただけるよう、当院のホームページに連携医療機関を検索でき

るシステムも構築しました。地域別・診療科別など様々な方法で医療機関を検索でき、診療時間や休診日などの詳細な情報も閲覧することができます。2020年6月現在、当院の連携医療機関は1,178施設ありますが、そのうち同意をいただいた777施設(2020年6月現在)を連携医療機関一覧としてデータベース化し、公表し

ています。

この度、さらなる「かかりつけ医」推進の取り組みとして、来院される患者さんへ当院の連携医療機関をお知らせするため、待合ホールに当院の連携医療機関を一覧にしたパネルを設置致しました。来院された際にはぜひご覧ください。



Topics



新総括副院長挨拶

五十嵐 薫（いがらし かおる）

2020年4月1日付けで総括副院長（歯科診療部門長）を拝命いたしました。平素は東北大学病院の運営に格別のお力添えを賜り、厚く御礼申し上げます。私は、顎口腔機能治療部の部長として、主に口唇口蓋裂などの頭蓋顔面部の先天異常に対する矯正歯科治療に携わっております。医科と歯科が完全に統合した2010年から歯科診療部門の執行部に加わり、これまで主に経営を担当してきました。この10年間に患者総数は24%増加し、大きく成長することができました。現在、本院の外来患者総数は1日あたり平均3,000名ですが、このうち、歯科診療部門の外来患者は約700名を占めています。地域の医療機関の皆様からご紹介いただく患者さんも年々増加し、2019年度は7,000名を超えました。診療の規模だけでなく、歯科イ

ンプラントセンターや周術期口腔支援センターを開設し、その機能を向上させてまいりました。これらはすべて地域の医療機関との連携の賜であり、これまでのご支援に重ねて感謝申し上げます。

さて、緊急事態宣言が5月に解除され、新型コロナウイルス感染の状況は小康状態となっていますが、医療機関への影響は甚大であり、この先も第二波、第三波に備えていかなければなりません。歯科診療はエアロゾルを生ずる処置が多いことから、感染拡大初期から特に注意喚起がなされてきました。本院もいち早く外来歯科診療を縮小し、地域の皆様には大変なご迷惑をおかけすることとなりました。しかし、幸いにも歯科診療に起因するクラスター発生事例の報告はなく、歯科医療機関における標準感染予防対策が有効に機能して

People

いると考えられます。本院のデンタルチェアユニットは余裕を持って配置され、しっかりとしたパーティションで区切られています。さらに、ほぼ全てのユニットにセントラル配管方式の口腔外バキュームを設置しておりますので、安心して歯科治療を受けてもらうことができます。現在は診療制限を解除し、新規の患者さんの受け入れも再開しておりますので、皆様からのご紹介をお待ちしています。

今後も、高度な先端医療を提供する役割を担う特定機能病院における歯科のあるべき姿を追求しつつ、地域に開かれ、信頼される存在であり続けるために、全力を尽くす所存です。皆様のご理解とご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。



診療科再編のお知らせ / 血液内科・リウマチ膠原病内科のご紹介

血液内科 科長 張替 秀郎（はりがえ ひでお）

2020年4月1日より、血液免疫科は血液内科とリウマチ膠原病内科になりました。血液免疫科という名称からどのような病気を扱っている科なのか発想するのは一般の方には難しく、内科の診療科ということすらピンとこない方がいらっしゃいました。実は東北大学病院のように血液・免疫科という名称を使っている施設は珍しく、他の大学病院、総合病院は基本的に血液内科、リウマチ膠原病内科を別々に標榜しています。その理由は、血液内科、リウマチ膠原病内科が扱っている病気が異なっているからです。たとえば、血液内科が扱っている病気は主として白血病や悪性リンパ腫といった悪性疾患ですが、リウマチ膠原病内科が扱っている病気は、SLE・関節リウマチといった良性

疾患です。また、血液内科、リウマチ膠原病内科ともに、内科の中でそれぞれ確立された専門領域であり、循環器内科、消化器内科などの専門領域と同じような立ち位置にあるのです。

そう考えてみると、東北大学病院として血液内科・リウマチ膠原病内科をそれぞれ設置するのは自然なことで、患者さんや紹介いただける先生方にもわかりやすくなったのではないかと思います。とはいえ、外来の場所はこれまで通り一緒に、血液免疫科の時と同じように診療しています。ただ、それぞれが見える化（科）されたことで、それぞれの専門性の意識や診療科としての責任感がより高まったように感じています。

血液内科としては、難治性血液疾

Department

患に対して標準的治療が確実にいえる体制を整えるとともに、分子標的薬や生物学的製剤、さらに細胞治療や造血幹細胞移植を組み入れた先進的治療ができる環境を用意しています。これまで以上にアクティビティーをあげて、東北地区の拠点として血液疾患に対する最先端の医療・臨床研究を行ってまいりますので、引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。



新診療科長挨拶 / 呼吸器内科 科長

杉浦 久敏（すぎうら ひさとし）

先生方におかれましては、日頃より東北大学病院呼吸器内科の診療に対するご理解ならびにご協力を賜り、誠にありがとうございます。

2020年4月1日付けで、東北大学病院呼吸器内科科長を拝命しました杉浦久敏と申します。今回、呼吸器内科科長就任に当たり、ご挨拶申し上げます。

当科は喘息や慢性閉塞性肺疾患（COPD）に代表される閉塞性肺疾患、肺癌などの呼吸器腫瘍疾患、種々の間質性肺炎、呼吸器感染症、睡眠時無呼吸症候群、さらにサルコイドーシスをはじめとする呼吸器稀少疾患など多種多様な疾患を診療しています。急速な高齢化が進む我が国において、

COPDや肺癌などの呼吸器疾患患者が今後さらに増加することが予測されています。また、住環境の変化からアレルギー疾患である喘息は全年齢層を通して増加しています。

呼吸器疾患は発見や診断の遅れが、生命予後やQOLの低下に直結する場合も多く、より早期の診断と治療介入が重要です。当科では、これらの多様かつ生命予後やQOLに直結する呼吸器疾患に対応すべく、各疾患領域のエキスパートを揃え、いかなる呼吸器疾患にも幅広く対応できる診療体制を構築しています。さらに各呼吸器疾患領域において最新のエビデンスに基づく治療やがんゲノム医療などの

最先端の医療を提供しています。

先生方におかれましては、診断や治療が困難な症例がございましたら、どうぞお気軽にご相談ならびにご紹介いただければと思います。当科の診療の詳細につきましては東北大学病院ホームページ (<https://www.hosp.tohoku.ac.jp/departments/d1110/>) をご参照いただければ幸いです。当科はこれからも「最先端の呼吸器内科診療を地域に還元する！」をモットーに東北地方の地域医療の発展に貢献してまいります。



People



リウマチ膠原病内科のご紹介

リウマチ膠原病内科 科長 藤井 博司（ふじい ひろし）

2020年4月、血液免疫科の免疫診療グループが一診療科として独立し、リウマチ膠原病内科が新しく設置されました。この度診療科長を拝命した藤井博司です。膠原病とはテレビや報道などで耳にすることもありますが、一つの病気を指すのではなく、関節、皮膚、血管、筋肉などの全身に原因不明の炎症をきたす病気の総称です。関節リウマチ、全身性エリテマトーデス、強皮症、多発性筋炎／皮膚筋炎、血管炎症候群などの膠原病と呼ばれる疾患を専門に扱っております。時には他のいくつかの診療科を経ても診断がつかない発熱などの患者さんの診療を行うこともあります。膠原病には全身の組織や臓器に慢性的な炎症が起こすものも

あり、未治療であれば複数の臓器障害をきたし致命的になることもある疾患です。稀な病気という印象がありますが、例えば関節リウマチは全人口の0.5%前後、30歳以上の方では1%以上の罹患率があり、決して珍しい病気ではありません。いまだに「難病」といわれているものも多く、時に致命的になることから治療が難しく予後も悪い病気のイメージがあるかと思えます。確かに以前は寝たきりになったり透析を余儀なくされた患者さんもいましたが、今はほとんどの場合普通のひととほぼ同じ生活を送ってもらうことを目標としています。臓器別の専門をもたない診療科ですが、他科の先生方の協力を得ながら診断、治療にあたっていきます。

基礎免疫学の発展と併行して日々診断、治療法が変化している分野です。生物学的製剤、分子標的薬の出現によりここ10年治療法も変化しており、今後も進歩していきます。内科医として全身を診ながら、最新の知見も生かして患者さんに最良の医療を行うのと同時に膠原病医療の進歩に寄与できるよう努めてまいります。



Department